

編集後記

『社会と倫理』第33号では、**特集**として6本の論考、**論説**として3本の論考を収録した。

特集1「ランドケア」と持続可能な地域発展では、経済学・神学・社会学という異なる専門性を持つ3名（笹橋、シーゲル氏、藤本氏）が、それぞれの専門的観点からオーストラリアのランドケアを学際的に掘り下げる企画となっている。ランドケアはオーストラリアの風土や文化、歴史性を背景として生まれた取り組みであるが、地域のコミュニティの自律性と持続性を担保する仕組みが構築されているという点で、学ぶべき点が多い。しかし、日本においてはランドケアの認知度はきわめて低く、それを学術的に深めようとする研究はこれまでほとんど存在しなかった。本特集は、ランドケアという取り組みに顕れる原理的な特質を、持続可能性、補完性の原理、地域資源の自治という観点から包括的に分析しており、他に類を見ないユニークな内容になったと自負している。今後もランドケアの可能性と課題について虚心坦懐に検討するとともに、ランドケアを支えている社会倫理的基盤についても探求を深めていきたい。

特集2「自殺と社会」は、社会学者の阪本氏、平野氏、樋口氏と政治学者の森山による共同研究の成果である。自殺問題の研究は、長らく自殺する「個人」に焦点を当て取り組まれてきた。そうした中で、本特集の3つの論考は、社会や他者の影響を論じており、その点で、自殺研究だけではなく、自殺対策の研究としても非常に重要な意味をもつ。「大きな社会変化がなければ同じ国内における自殺死亡率は一定」であること、自殺の問題には、「孤独」と「孤立」が強く関わり、「社会的に孤立している層は自殺念慮の経験率が高い」ことは、社会が個人の自殺に大きな影響を与えていることを示唆する。また近年、個人がこうした状態から抜け出せるように「SOSの出し方教育」を推進する動きもあるが、社会的状況からSOSを発信できない人もいる。こうした教育の在り方が抱える問題を含め、社会という視点から自殺を考える特集になったと自負している。

論説では、子の養育に関わる重要論考3本を掲

載した。梅澤氏と白井氏には、本誌掲載の論考と共通のテーマで講演を依頼し、その折に交わされた議論を踏まえつつ、改めて論考を書き起こしていただいた。梅澤氏と白井氏は、自身の専門領域に即し、養子縁組制度のありようをそれぞれ法学的観点と社会学的観点から分析・検討している。梅澤氏の論考は、現代日本において特別養子縁組制度が抱える様々な問題点を剔抉するものであり、今後の関連研究において基本文献と位置づけられうるものと言ってよからう。他方、白井氏の論考は、子がダウン症候群であることを事由に養子縁組制度を使うことに伴って生じる様々な争点を浮き彫りにし、その意義を示そうとする挑戦的な試みである。養子縁組制度の利用可能性がダウン症候群の子の誕生に及ぼす積極的な影響についても言及されている。さらにこの2本と併せて、アタッチメントの文化研究の動向をサーベイした杉尾氏の論考を読むことで、より大きな文脈から子と養育をめぐる倫理的諸問題について思考を始めることができるだろう。これらの論考を特集「子と養育の倫理」といった形で括ることもありえたかもしれないが、それぞれが独立の意図のもとで書かれながら並び立っているところに本テーマの要点があるようにも思えたため、元々の経緯を尊重して事後的な特集化は控えた次第である。

最後に、本号には、13本の書評が収録された。そのうち、著者との応答を含むものが4本あり、読み応えのあるものとなっている。書評対象図書領域も例年通り多様で、ジョン・ロック研究、経済思想史研究、現代分析政治哲学研究、社会心理学研究、スナックをめぐる学際研究、共依存研究、宇宙倫理学研究、国際関係論研究等の注目書が気鋭の論者によって評されている。本誌の書評は学術書評であるため、それぞれ対象図書の核心的な内容に迫る重量級のものばかりである。火花散る誌上論戦からの知的な刺激をお楽しみいただきたい。

現在、早くも次号の企画を進めているところだが、新たに研究所に加わったメレ氏（専門は国際人権法）が特集を検討中である。乞うご期待。

笹橋一輝、森山花鈴、奥田太郎